

佐久大学設立の経緯

学校法人佐久学園 理事長 檜山 幹男

佐久大学は学校法人佐久学園が設立母体です。この学校法人は昭和39年（1964年）に設立され、全日制の佐久高等学校を置いていました。また、昭和62年（1987年）には信州短期大学が開設認可され、教育を行ってきました。

その後、いくつかの組織変革を経て、平成19年（2007年）、ここに佐久大学の設置が認可され、平成20年（2008年）4月、開学の運びとなったのです。

平成20年当時、私は短期大学の監事を引き受けて9年になっていましたが、平成18年には理事長に就任し、社会の変化に応じて、これからの教育の方向性を再考し、新たな体制を築かねばならないと考えていたのです。

しかし、大学の新設は難しいというのが世間一般の通念で、まして大学の新設には少なくとも3年から5年はかかるといわれていました。

翻って、大学設立に向けての活動は平成17年ころから始めていました。当時佐久総合病院におられた盛岡正博氏（現JA長野厚生連 理事長）に面談を申し入れて、大学設立の意向を伝え、協力を打診しました。

「少子化の波の中で、短期大学の運営は曲がり角にあり、将来に不安を感じている。過去に2回、4年制大学の創設を企画したが、障害に直面して断念した。……JAや厚生連の協力で看護大学を設立できないか」という話をしたのです。（「 」内、盛岡氏の記述引用）

世間では看護系大学が雨後の竹の子のごとく設立されていましたが、これはおそらく、社会からの看護職への要望が高く、また、看護職は医療の中できわめて重要な役割を果たしており、それに国家免許を得て、安定して働くことのできる職業として、また、長い歴史のある分野だと考えると、看護学を大学レベルで教育していくことの意義は大きいと感じられました。盛岡正博氏はこの看護系大学の設置に賛同してくれ、設立に向けての活動が一気に進むこととなったのです。

しかし、私について言えば、私は現信州大学繊維学部出身で教育や医療に関しては全くの素人、大学教育についても全くの門外漢、何も知らない人間です。しかし何も知らなかったことが結果的に幸いしたかもしれません。設立準備のための煩雑さや困難を熟知していたら、できなかったかもしれません。しかし知らぬことが、怖いもの知らずになり、私一人が、「必ずできる！」と理由もなく確信していました。私が生来、楽観的なものかもしれませんが、私が長年培ってきた勘がそう確信させたのでしょう。今回の一連の開学準備に当たっては、多くの人の知恵と力に恵まれ、また、良いコンサルタントに巡り合えました。資金面では、大学新設に当たっては借入れができないという決まりの中で、総予算27億円という多額の資金の調達が付や補助金に助けられて達成できたことです。こ

うした多くの力と協力の結集が、本学開学への道をつくったと感謝しています。

通常は3-5年はかかるという開学準備期間も本学の場合はわずか1年半という異例の速さで進んだのです。多くの立派な名声と業績を持つ教授陣が、佐久大学に着任してくれ、まさに、人が人を呼んでくれたといえるでしょう。私は理事長として、学園の経営者として、学術的にも、人間的にも優れた人材を確保することが、経営者の使命であると確信しています。学生たちはここで良い教師に巡り合い、成長の糧としてほしいものです。

また、大学運営に当たっては、役員会、教授会、事務局が対等な立場で経営に参画していくことが必要とも考えています。

さらに言えば、経営は大学も企業も同じもの、大事なものは「経営者の決断」だと思います。経営者たるもの、立ち止まることは「悪」です。経営は生き物なのです。時代の要請や変化に対応し、前進することが経営者の使命であると考えます。

さて、佐久大学も開学から5年目を迎え、第一期の卒業生を送り出し、大学院修士課程が発足し、第二フェーズに入ったといえるでしょう。佐久大学は次なる目標を見据えて、前進しなくてはなりません。